

◆プロフィール

専門：家族社会学

介護の分野で妻や親を介護する男性介護者支援当事者支援。

当事者が孤立しない。

今やもう介護するのは女性だけではない。働く介護者や子ども若者でも介護する状況がある。

「(公財)ユースサービス協会」(京都市若者支援団体・2017年より事例検討会)で認識したこと。大学生が自分自身の人生に向けた岐路に悩むライフコース上の位置にいることを踏まえて、「若者キャラの集い」(オンライン支援)を開始している。個人的家族環境も取り組みに携わる一因であった。

◆当事者を真ん中に置いた支援

当事者参画が自身の大きなテーマ。

現在の構成メンバーは、当事者、元当事者、支援者含めて80名ほどの規模。

◆ヤングケアラーの定義(厚労省)

本来大人が担うと想定されている家事家族の世話などを日常的に行っている18歳未満の子ども。法令上の定義はない。単なるネグレクトという事案とは異なる。この考え方をこの事例検討会の中でどのように生かしていくのかということが一つ大きなテーマになる。

◆中高生調査

中学校2年生については5.7%、全日制の高校については4.1%。

クラスに必ず1人か2人くらいは統計的に表されている。

◆小学生・大学生の調査結果

小学校6年生で6.5%。対象はきょうだい、当事者が幼いという現実が圧倒的に多い。

情報の非対称性(両親の状況と子供の認識)が存在。

ケアに関わる子どものうち48.2%が早い段階(小学校低学年程度)から当事者となっている。

何らかの形でケアに関わっているという大学生 6.2%。過去に関わっていたという大学生 4%。

大学生までライフステージが上がっていくと、10人に1人はそれまでの人生の中で、何らかの形でケアに関わっていたということになる。ケアの対象もかなり多様化。

小中高大それぞれのライフステージのケアの実情が数字に示されている。

◆ヤングケアラーという言葉の功罪

「介護者」という言葉で訳してしまうと高齢者介護のイメージにどうしても引きずられてしまう

「ケアラー」・・・「ケア」という言葉にはものすごく多様な側面がある。

高齢者介護だけではなく、幼い兄弟のケア、不登校の兄弟のケア、障害のある兄弟のケア、精神疾患を抱える親に対するケア、外国ルーツの家族へのサポート etc・・・多様なスタイルのケアが家族の中にはあるということにしっかり光を当てることができたことが大きな功績。

◆どこからがケアラーか ー家庭の中にケアがあるということー

誤解：子供・若者だからケアに関わってはいけない

文化：お手伝いはむしろした方がいい

全てのケアが手伝いから出発をするということもまた事実。見極めのポイントは、(1)保護者の見守りがあるかどうか、(2)自分の時間があるかどうか、(3)自分の時間が欲しいと言ったか

今日はしたくない、今日はやりたくないという選択肢がきっちりあった上で、それができているかどうかということが客観的な見極め。役割を放棄することによって日常の家族生活が営めなくなっているとすればそれは単なるお手伝い以上のことかもしれないということから話を始める。

誰が支援対象なのかということが非常に大きなテーマ。線引きは支援対象を限定的にさせてしまって、本来関わらなければいけない子どもたちを捉え損ねてしまう可能性がある。ケアラーの自覚は自身の負荷にもつながるため、「doing」(成すべきこと)、「being」(あるべき姿勢)について光を当てること。その上で、家族の中にケアがあることの余波を確実に受けながら、生活の制約を受けているということに目配りできることも重要。

現在の平均世帯人員は 2.21 人。小規模化が進んでいる。生計維持のためにケアに手が回らない→他の家族がケアを担わざるを得ない→子ども・若者ヤングケアラーの登場

ケアだけの問題ではなく経済状況も…。「お金とケアはセットで動いている」という認識が必要。

◆「ヤングケアラーとは」

自分自身の人生の土台作り自体の時間とか、やりたいことにケアが大きな影を落とす。それはかなり長期にわたって影響を及ぼす。自分自身の人生の土台作りの時間や心の余裕。そうしたものをいかに確保することができるかが一番の大切なポイント。

18歳以降本当に頼れる制度が、全くといっていいほどないという状況。

社会的養護が必要な子どもたち、経済的に困窮している家族とか、家族に依存できない若者たちに共通する課題。

罪悪感、自分の人生を生きていいのだろうか躊躇せざるを得ない状態が生まれている。

ライフステージを通じ、ケアの問題が非常に大きな影響力を及ぼしており、大学生ケアラー等が心配しているのは、自分の恋愛・結婚・子育てのチョイスがそもそもできるのかどうかということ。

◆なぜ「子ども・若者ケアラーか」

安心して彼らが自分自身の人生を生きられるというところに向けて、私達は何ができるかということを考えていく必要がある。

「子ども・若者ケアラー」という言葉を使って、切れ目ない継続的な支援が重要であることを訴

え。

「子ども・若者だから」(＝弱者・保護の対象)ということがものすごく強調されると、何もさせてはいけないみたいな曲解されることがあり、親がバッシングされたりすることが顕在化。

自分自身の人生の土台作りをきっちり社会が確保することが重要

ケアを抱えながら生活するとか、生きていくということはずごく大変で、それ自体に支援が必要であることについての社会的合意を図っていくことが重要

#### ◆「ただ聞いてほしい」がなぜ難しいのか

家族の中の論理が共有されてしまうとそこから離れたたいという気持ちがなかなか言い辛くなり、そう思っではいけないというふうに思ってしまう。

かわいそうって思われたくない。

スクールカウンセラー相談先があったとしても自分は多分そこはいけない(人目を気にする)

マスメディアの誇大アナウンスで自分の気持ちに蓋をする

様々に変わる気持ち(気持ちの浮沈)

自分のタイミングで話ができる環境がまだまだすごく少ない

余談・部活・進路指導等が機能する場合もある

#### ◆家族ケアの「美化」－教育・福祉・経済・政治

家族というのはあくまでもマンパワーでしかないという考え方。ケアを要する人に対する支援というのが進んできているが、その横にいる家族は二の次にされてしまう。

家族ゆえの困難に寄り添う視点が実は今すごく足りてなくて、まだまだ専門職では、「家族なのになんでできないんだ」というような言葉掛けがいたるところで見られる。

#### ◆教育を通じて深く内面化された家族規範

日本では学校教育でも家族愛はいいことだというメッセージがどうしても前景化してしまっている。

他方、スウェーデンの教科書では、「家族だからといってうまくいかないこともあるし、家族だからこそしんどいこともあるし、それは誰も起こるし、それは言っでは責められることではない」というメッセージが示されている。

#### ◆ケアラー支援という視点

親は、全てすり減らしても、子どもに尽くさなければいけないというメッセージが社会の中で根強い。

親も、ケアによって自らの諸資源(お金・時間・感情)を枯渇させないことが重要。親もしっかり諸資源が担保されて、自分自身が維持できるような状況の中で初めて子どもに対するケアができる。

ケアラーになって生きる人たちの社会的な脆弱性社会生活上などで様々な障壁に対する配慮というのは日本ではまだまだ十分ではない。

そのために、「一次的依存」(不可避の依存：病気・障害・老いなど)と「二次的依存対応」(ケアラーの脆弱性を補完する社会的機能)が重要。

#### ◆虐待パラダイムからケアラー支援へ

虐待パラダイムとは違う視点で捉えていくことが大きなポイントになる。

問題を家族内で完結させない、特に保護者をどうバックアップできるかが重要ポイント。

虐待という物差し上の、しかも緊急度とか重篤度という基準は、ヤングケアラー支援はなじまない。

まだ起こっていないことに対して漠然とした不安といったものが、実はすごく大きかったりする。今どんなことが起こっているかという物差しだけで見ていくと、すごく過小評価をされてしまう。親がしっかりすれば問題が解決するというのではなく、親も含めて社会全体でバックアップしていく、流れを作っていくことが大きなテーマ。

#### ◆支援例 子どもの変化

母親に対する支援を充実させることによって、子どもの生活が好転する

#### ◆家族まるごと支援(Whole Family Approach)－英国

日本の場合は、家族構成員がみんな一丸になってケアを要する人に貢献しなければならないという捉えられがちだが、英国では、家族構成それぞれでニーズが異なることがあるという捉え方から出発をして、支援者はそれぞれの異なることになるかもしれないニーズを上手に引き出して、それにそれぞれに寄り添って、どちらかの優劣を決めるのではなく、全ての家族構成員が自分自身の人生を生きられるように調整をするということが何よりも重要であるとされている。

親自身の諸資源が枯渇していないか、親自身の資源がどうやったら確保、あるいは活性化するか、親自身が自分自身のケア責任を果たすために、親自身にサポートをしていくという視点がすごく重要。

私達の依存先はどうしても家族に集中しがちであるが、自立というのは、家族にだけ集中していて、家族の中で完結していた依存先を、もっともっと(外に)広げていくこと。

子どもが個人として家族以外の資源との関係をどんなふうに増やしていけるか、家族以外にも頼れる人たちがいることによって、安心して自分自身の生活家族と距離ができるということが重要。ケア後が固定化した後でコミットするのではなく、家族の中にケアが発生した時点から、特定の人にケア負担が集中しないよう社会資源と繋いだり、あるいは働く環境を整えたりすべき。(予防の視点)

特に児家センについてはファミリーソーシャルワークというまさに家族丸ごと支援の視点を取り入れやすいフィールドである。

心理療法等により子どもたちのメンタルヘルス面でも、非常に大きな役割を果たしうる。

ヤングケアラー支援の調整役としてすごく大きな役割が果たせると大変期待を持っている。

以上